本学幼児教育学科における歌の指導についての検討

「表現」の内容の一環として

山　岸　　徹
増　田　佳　子

本稿では、大阪キリスト教短期大学幼児教育学科において音楽分野、とりわけ「歌うこと」に関する授業を担当している山岸、増田の 2 名の教員がそれぞれの立場でこれまでに行ってきた授業の内容を検討し、今後の授業内容の改善や再構築について考察するものである。

幼稚園教育要領において、音楽分野は「表現」の内容として取り扱われている。本稿においては、その中でもとくに「歌うこと」に焦点をあて、子どもたちの表現活動を指導できる力量を受講学生が身に付けるための、より効果的な方法、プロセスを目指す。また、本学科のカリキュラムにおける他の音楽分野の科目との関連の状況についても併せて考察する。

平成 28 年度については、本学科において筆者 2 名は以下のような科目を担当した。

・山岸：音楽理論、音楽理論Ⅱ（伴奏付特講）、声楽Ⅰ、幼児音楽Ⅰ・Ⅱ、公開演奏
・増田：声楽Ⅱ

以上のすべての科目において､つねに歌うことの活動を大切にして指導を行っているが、本稿においては、おもに「声楽Ⅰ」､「声楽Ⅱ」について取り扱う。

なお、本稿における山岸と増田それぞれの分担部分は次の通りである。

・山岸：序文、第 1 章、第 2 章、第 5 章、結び
・増田：第 3 章、第 4 章

1.「声楽Ⅰ」の授業の概要と到達目標

「保育をするにあたり必要とされる表情豊かな声を得るための基礎を学び、歌うことの楽しさを知る。積極的に他者に働きかける歌唱を目指し、子どもたちが豊かな音楽活動を行うための保育力を養う。視唱などの基礎練習とともに、子どもの歌の歌い方を学ぶ。」以上が、本授業のために掲げた「授業のねらいと概要」である。

実際の内容としては、まず毎時間のはじめにおいて、適切な呼吸法に基づいた合理的な発声法が身につくよう発声法の基礎的な訓練を繰り返し行った。その際には、声帯、声門、

鼻腔、口腔、軟口蓋、腹式呼吸、胸式呼吸、横隔膜、腹斜筋、腹直筋、肋間筋、表情筋、声門下圧などのキーワードに基づいて呼吸法のメカニズムの説明を行った。その後、多数の童謡を中心とした教材を用いて独唱や弾き歌い、合唱を取り混ぜて指導した。一方で、読譜力を養うためには「コールユーブンゲン」第 1 巻（抜粋版）も使用した。このような授業内容については、当該学科内で同様の科目を担当する他の教員とも打ち合わせをした上で統一を図っている。また、弾き歌いにあたっては「器楽」（ピアノ）担当教員とも連携し、相互の授業において共通の楽曲を各々の観点から指導した。

本授業の到達目標として、以下のような内容を掲げている。

・自分の声の長所を生かし、楽しんで歌唱できるようになる。
・音感を身につけ、正しい音程で歌唱できるようになる。
・歌詞の意味を理解した上で表情豊かに歌唱できるようになる。

2.「声楽Ⅰ」の授業内容、及び内容に関する検討

本授業は、必修科目としてクラス単位で開講されている。筆者は本授業を平成 27 年度から担当しており、本稿執筆時においては 3 年目の担当となる。平成 27 年度は一般の 1 クラスを、平成 28 年度からは本学独自の方式である「幼児音楽系プログラム」選択者のクラスを担当している。なお、平成 28 年度までは通年科目として開講されていたが、平成 29 年度からは学則変更により「声楽Ⅰ」（前期）と「こどもと歌」（後期）に分割され、両方を通して 1 クラス担当している。

各年度の受講人数は次の通りである。平成 27 年度：33 名、平成 28 年度：31 名、平成 29 年度：24 名。実技の個人指導という点を重視するとすれば、より少ない人数での授業が理想的ではあるが、クラス単位で授業することにより学生 1 人ずつが実際に他の学生に対して模擬指導の体験をすることが可能であることや、合唱をすることによって声が響き合う美しさを体験することができるなどの効果も得ることができた。クラス授業ではあるが、必要に応じて適宜モデルレッスンのような形式で個人指導も織り交ぜながら授業を進めた。

概ね前掲の内容を経て到達目標を達成できたと考えているが、一方で以下に示すような検討すべき課題も見出すことができた。それぞれについて講じた対処の方法とともに示す。

（1）読譜力育成のための教材「コールユーブンゲン」第 1 巻について

限られた授業時間内では全曲を取り扱うことができず、取り扱う楽曲を効果的に選択しなければならない。また、第 2 巻、第 3 巻は多声部の曲によって構成されているが、第 1 巻は単旋律の曲のみによって構成されており、それだけではポリフォニーの訓練を行うことができない。

【対処の方法】

オリジナルのソルフェージュ教材を作成し、「コールユーブンゲン」を補完するかたちで使用した。（**譜例 1.「ソルフェージュ課題 1」**）これは、2 声部からなる 8 小節の簡単な曲による曲集であり、筆者が非常勤講師として出講している他大学の授業でも教材として使用している。また、平成 29 年度において筆者が担当した本学主催の教員免許状更新講習においても教材として使用し、効果を上げることができた。階名の他、「ア」(a)、「ラ」(la)、「ル」（lu）など適宜の読み方で歌うこととするものである。

実際の授業においては、まずクラス全員を 2 声部に分けて歌唱練習し、その後、さらに少人数のチームに分かれて自主練習させた。最終段階では 2 名ずつの組み合わせによって二重唱し、全員が演奏発表をした。そのことによって他者と合わせて交感しながら音楽をすることの訓練ができ、学生が自分たち自身で音楽を作り上げていくプロセスにおいて様々な発見があり、自分たちが音楽をすることの喜びを感じることができたと考えている。

教材を作成する際の意図として、とくに以下の点に注意した。

・音域に無理がないこと。
・上声部、下声部の動きに偏りがなく、それぞれが独立したメロディーラインを形成していること。
・それぞれの楽曲の表情を歌い手が自然に感じ取ることができ、曲想を自ら容易に表現できること。このため、各曲にはあえて発想記号を付けず、学生がそれぞれの曲にふさわしい歌い方を考えて表現できるよう意図した。

（2）弾き歌いについて

個々の学生のピアノ演奏技術にはかなりの差があり、ピアノ伴奏を弾くことに集中し過ぎるあまり、しっかりと発声して歌うことができない学生が多い。また、演奏中に周りのことに気を配る余裕がなく、実際の保育現場において子どもたちの声を聴きながらリードするという役割を十分に果たすことができるところまで到達することがかなり難しい。

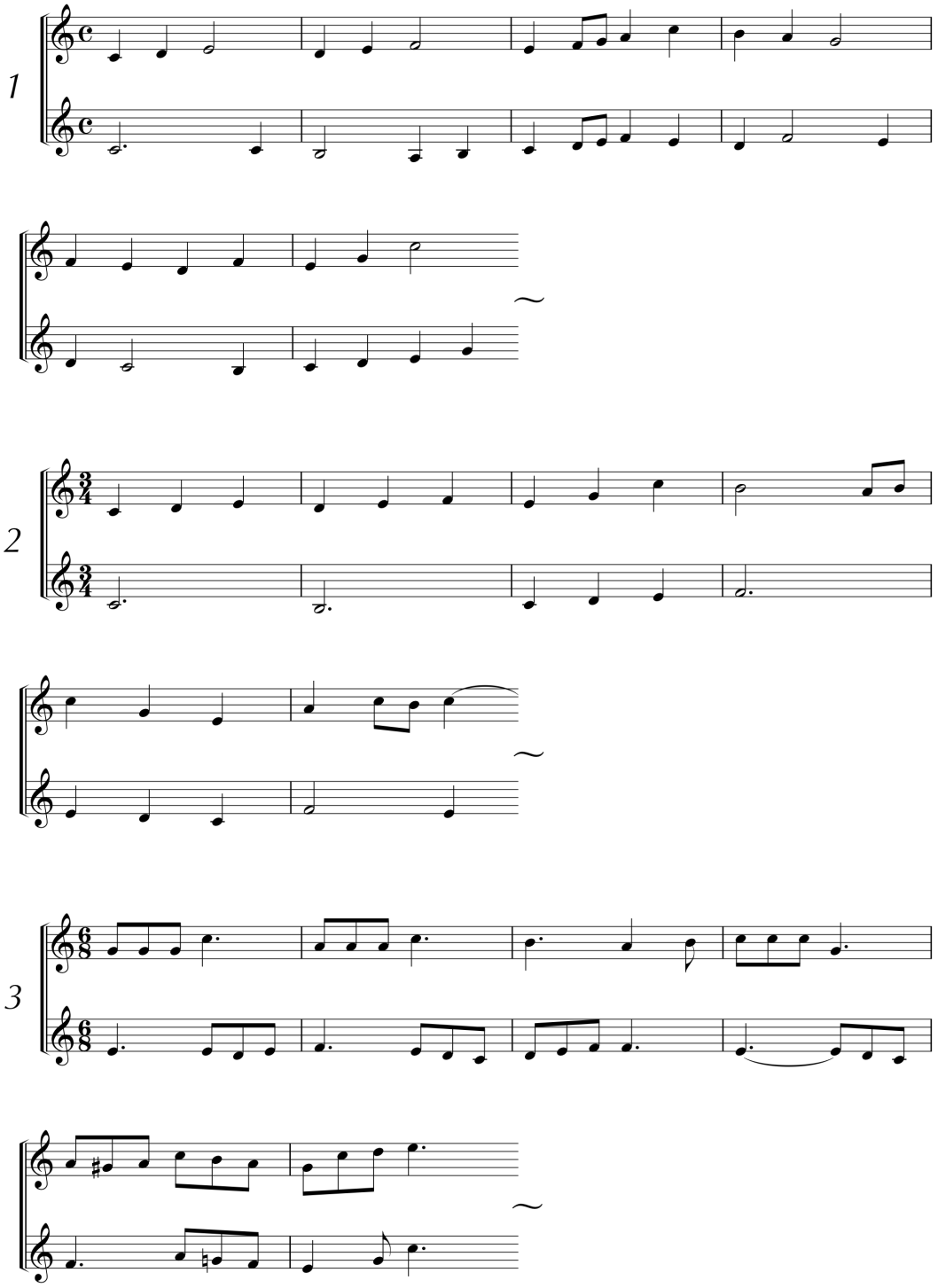
【対処の方法】

筆者の授業において弾き歌いの曲を取り扱う際には、まず歌を歌うことと伴奏を弾くことに分けて指導をし、その後で合わせるかたちで弾き歌いをするように段階を経て進めた。個々の指導においては、演奏する際の姿勢や発声の方法、楽譜の見方、伴奏の運指など、細かなアドバイスをすることによってかなり改善する場合も多かった。また、実際の現場では子どもたちに対し、それぞれの曲に応じた「アインザッツ」の指示を分かりやすく示すことも大切であると考え、必要に応じてその方法の具体的な指導も行った。

ただ、全体としてみると、受講学生にとって弾き歌いはかなりハードルが高く、指導するにあたって前述のような問題点が十分に解決できたとは考えにくい。

譜例1.　「ソルフェージュ課題１」（抜粋）
（ハ長調：４分の４拍子、４分の３拍子、８分の６拍子）

山岸 徹 作曲



3.「声楽Ⅱ」の授業の概要と到達目標

・声楽Ⅰの基礎授業の上に、より声楽的な実力を深めるために色々な内容を取り扱う。
・保育者としての実践のための幼児の歌の歌唱、伴奏、弾き歌い、歌唱指導をはじめ芸術的な楽曲にも取り組み、重唱、合唱等も行う。
・基礎練習を行い、前期は歌唱、弾き歌い、歌唱指導（指導案作成、手話付きの歌唱、伴奏)、後期は歌唱、弾き歌い、歌唱指導実践を行う。

以上が「授業の概要」である。また、「授業のテーマ及び到達目標」は次の通りである。

・さらによい自分の声が身につく。
・保育者としての、特に声楽的な力が身につく。
・芸術的な曲も重唱、合唱等ができるようになる。
・弾き歌いのレパートリーを広げ、技術が身につく。
・歌唱指導（伴奏含む）ができるようになる。

4.「声楽Ⅱ」の授業内容、及び内容に関する検討

本授業は選択科目としてクラス単位で開講されている。近年筆者が担当したこの授業の受講者数は次の通りである。平成 28 年度 A クラス（以下同様）: 23 名、B : 17 名、C : 11 名、D : 29 名、E : 11 名、F : 8 名、総数 99 名。平成 29 年度 C : 4 名、D : 2 名、E : 14 名、F : 14 名、総数 34 名。

本授業の内容とそれぞれの指導の留意点は以下の通りである。

（1）発声練習、及び基礎練習

2 年生では発声練習、及び基礎練習のために“Alleluia”（山岸徹作曲）を用い、3 声部に分かれてすべての声部を担当して歌うことが出来るようにした。保育現場での合奏や合唱では､保育者はすべてのパートを理解した上で指導していく必要があるからである。当初は戸惑いも見られたが、この曲を 1 年通して歌っていく過程において、お互いに聞き合い、美しさを感じながら歌えるようになった。また、階名唱でしばらく歌うことにより音程感覚やフレーズ感覚を養った。最初はピアノの音に合わせて歌い、徐々にア・カペラを目指し、最終授業では 3 人での重唱を行い各グループの演奏を聴き合った。

【指導上の留意点】

・1 年生で身に付けた基本的な技術を生かし、さらに声を伸ばしてゆくこと。可能な限り喉に負担をかけないように、頭声発声でよく届く声を目指して指導した。
・顔の表情によって響きが変化することを体得させ、歌に生かせるようにした。童謡は言葉を伴うのでそれを正しく理解し表現できるように指導した。
・それぞれのパートの動きを理解させ、フレーズの重なりを感じながら美しさを表現でき

るように指導した。息継ぎを正しい箇所で行い呼吸を伸ばすことに注意した。

（2）季節のうた・童謡

発声練習、基礎練習の次に、学生が来年の今をイメージしやすいよう、季節に添った子どもの「うた」を出来るだけ多く通年で歌い、伴奏、歌唱指導にも学習の幅を広げることを目指した。以下に 5 月のある授業で取り扱った曲目を記す。この日は「季節」（こどもの日・母の日・時の記念日・歯と口の健康習慣）、「果物」、「作曲者大中恩」という 3 つののカテゴリーをテーマとして選曲した。それぞれの曲の完成度により授業で取り扱う回数は異なるが、取り扱う曲数は通年で 200 曲に及んだ。

・2017 年 5 月 15 日（月）

コイノボリ（近藤宮子作詞、作曲者不詳）・ぞうさんのぼうし（遠藤幸三作詞、中村弘明作曲）・おかあさん（田中ナナ作詞、中田喜直作曲）・おかあさん（鹿島鳴秋作詞、宇賀神光利作曲）・とけいのうた（筒井敬介作詞、村上太郎作曲）・おおきな古時計（保富康午作詞、ワーク作曲）・くじらのとけい（関和男作詞、渋谷毅作曲）・はのうた（まど・みちお作詞、金光威和雄作曲）・はをみがきましょう（則武昭彦作詞・作曲）・ねずみのはみがき（阿部直美作詞・作曲）・びわ（まど・みちお作詞、磯部俳作曲）・みかんの花咲く丘（加藤省吾作詞、海沼実作曲）・サッちゃん（阪田寛夫作詞、大中恩作曲）・トマト（荘司武作詞、大中恩作曲）・おなかのへるうた（阪田寛夫、大中恩作曲）・ドロップスのうた（まど・みちお作詞、大中恩作曲）

【指導上の留意点】

新旧偏りなく、保育現場で取り上げられている楽曲を正確に表情豊かに歌えるようにした。残念ながら学生の知らない歌が多く、また聞いたことはあっても正確さに欠けることがあるので、階名唱を行った後で言葉を加えていった。分からない言葉は各自で調べさせるようにした。演奏をメディア等で聞いて覚えてから歌うのではなく、できるだけ楽譜から歌えるようにした。それぞれの楽曲を学生が歌唱指導する際に、どのように指導したいかということを常にイメージしながら歌わせた。歌唱指導の例を説明した。子どもたちが歌うとどのような難しさがあるかを説明し、言葉・音程・テンポ等の解決策を模索させた。歌の歴史的背景や作詞作曲者に関する知識の大切さも説明した。また、学生が自分で調べることができるよう、参考となる本を紹介するなどした。ピアノ伴奏は、可能な限りあらかじめ練習しておくように指導した。また希望者には伴奏を体験させた。伴奏をする際の留意点を取り上げ説明した。

（3）弾き歌い

以下の曲の中から受講者に 1 曲ずつ選択担当させ、公開レッスン方式で解説、歌唱指導を行った。1 年次と同じ曲が含まれているのは苦手意識を持つ学生のための負担軽減のね

らいがあるが、できるだけ新しい曲を選ぶように促した。各自が担当した曲以外も練習しておくように促し、希望者には個人指導も行った。各自が選曲した曲については、全員が暗譜で演奏できるように繰り返し指導した。

（前期）

ふしぎなポケット（まど・みちお作詞、渡辺茂作曲）・シャボン玉（野口雨情作詞、中山晋平作曲）・ぞうさん（まど・みちお作詞、團伊久磨作曲）・おつかいありさん（関根榮一作詞、團伊久磨作曲）・かわいいかくれんぼ（サトウハチロー作詞、中田喜直作曲）・やぎさんゆうびん（まど・みちお作詞、團伊久磨作曲）・いぬのおまわりさん（佐藤義美作詞、大中恩作曲）・七つの子（野口雨情作詞、本居長世作曲）・揺籃のうた（北原白秋作詞、草川信作曲）・どんぐりころころ（青木存義作詞、梁田貞作曲）・とんぼのめがね（額賀誠志作詞、平井康三郎作曲）

（後期）

ありがとうさようなら（井出隆夫作詞、福田和禾子作曲）・思い出のアルバム（増子とし作詞、本多鉄麿作曲）・一ねんせいになったら（まど・みちお作詞、山本直純作曲）・ドキドキドン！１年生（伊藤アキラ作詞、桜井順作曲）・やきいもグーチーパー（阪田寛夫作詞、山本直純作曲）・赤鬼と青鬼のタンゴ（加藤直作詞、福田和禾子作曲）

【指導上の留意点】

座った姿勢で歌唱し、合唱の伴奏も可能なピアノ伴奏を弾きながら１人で歌うのが弾き歌いであり、かなりの声量も必要である。そのために、平素の歌唱も立った姿勢と座った姿勢両方で行い、姿勢・音量のバランス・ピアノの音の出し方などを理解させた上で、言葉をはっきりと乗せて歌えることを指導した。弾き歌いには歌とピアノの両方が余裕をもって演奏できることが不可欠であり、どちらが欠けても成り立たない。それぞれの基礎訓練を継続しながら演奏のマナーとしての姿勢、楽器の扱い方に加え、就職試験を見据えた上での視線や服装などについても指導した。人前で演奏することの緊張感を経験し、苦手意識を克服してゆけるように心がけた。

後期の弾き歌い課題曲では卒園式を想定したものを多く取り上げ、平素の保育だけでなく、より大勢の人前での式典などの演奏にも対応できるように指導を行った。より緊張感を伴う場面での演奏を想定し、どのような対応が必要になるか説明した上で、課題曲だけはなく必要となる曲を提示し解説を行った。弾き歌いは１人で歌いながら伴奏をし、完成させることにより表現が完結する。そのことに達成感を味わい喜びを感じることができるようにした。伴奏も「うた」とともに行うことによって、より理解が深まり歌い手の立場に立った伴奏を行うことが出来るようになることを理解させた。

（4）歌唱指導（前期）

後期の歌唱指導演習に向けて前期では下記の項目を取り入れた。

輪唱

Dona nobis pacem（作者不詳）・ドレミのカノン（岡本敏明作詞、ケルビーニ作曲）

階名唱から日本語、原語と進める。ア・カペラでの輪唱を目指して様々な形態での歌唱に取り組みハーモニーの美しさを感じることができるようにした。また、出だしの合図や指揮を体得させた。

輪唱指導

かえるのがっしょう（岡本敏明作詞、外国曲）

3 歳児への指導を想定し、言葉を考え交代抽出で歌唱指導体験を行った。指導案については添削指導を行った。

パートナーソング

かえるのがっしょう（岡本敏明作詞、外国曲）とかたつむり（文部省唱歌）

メリーさんのひつじ（高田三九三訳詞、アメリカ曲）とロンドン橋（高田三九三訳詞・イギリス曲）他

内容を説明した後に歌唱体験させ、パートナーソングの面白さを味わって興味を引き出し、実際に子どもたちへの指導を行うにあたり必要な事柄を話し合った。

手話をつけてうたう

チューリップ（近藤宮子作詞、井上武士作曲）・ぞうさん（まど・みちお作詞、團伊久磨作曲）・Believe（杉本竜一作詞、作曲）・あめふりくまのこ（鶴見正夫作詞、湯山昭作曲）・手のひらを太陽に（やなせたかし作詞、いずみたく作曲）・はじめの一歩（新沢としひこ作詞、中川ひろたか作曲）・いぬのおまわりさん（佐藤義美作詞、大中恩作曲）・にんげんっていいな（山口あかり作詞、小林亜星作曲）・すうじの歌（夢虹二作詞、小谷肇作曲）

4 チームに分かれてチームごとに練習させ、手話をつけて歌唱発表と歌唱指導をさせた。

わらべうた

とおりゃんせ（わらべうた）・はないちもんめ（わらべうた）他

日本に古くから伝わるわらべうたを歌い、地方によって音や言葉に違いがあることや伝承的な手遊びについても触れ、実際に体験させた。昔から子育てと「うた」は切り離せないものであり、手遊びや玩具での遊びが「うた」とともにしつけの一端を担ってきた。その歴史とともに「うた」を学び、保育に生かせるようにした。また子どもにまつわる行事（お食い初め・七五三・節句など）について知識を確認させ、それぞれのわらべうた、童謡を指導した。

【指導上の留意点】

後期の歌唱指導また実習実践に向けて様々な経験をさせ、困りごとを発見して解決して

ゆけるように指導を行った。音楽的経験を多く実際に経験し、表現が中途半端にならないようにすることの大切さを学ばせた。遊びとしての「うた」の取り入れ方を考えさせ、難しさをそのままにせず、楽しさの中で子どもたちが習得してゆけるように工夫させた。子育て、また幼児教育に「うた」は必要不可欠であり、西洋からの音楽以前から伝わる伝承の「うた」についても歴史的な背景を知識として持ち、幼児教育者としての実践を行えるように配慮するよう指導した。

（5）歌唱指導（後期）

後期では学生一人ひとりが持ち時間 20 分程度を用い、できるだけ既習曲を除いて選曲させ、歌唱指導を行った。子ども役の学生は楽譜を用いずに子どもたちと同じ条件で先生役の学生に集中し、子どもの立場になって指導を受ける。板書・歌唱指導の補助教材は使用してよいこととした。言葉を絵で表現したり、エプロンシアターや紙芝居、手作りのパペットなどの補助教材を用いるなどしながら歌唱指導を行った。模範唱を区切りながら指導するなど､様々な方法で取り組ませた｡学生が自分でその曲にふさわしい指導法を考え、伴奏、弾き歌いとともに入念に準備を行う。憧れの曲を選ぶなど、こだわりを持って選曲を行う学生がほとんどだが、伴奏の難易度などから判断して選曲する学生もいた。指導者の間違いは、そのまま子どもたちに伝わってしまうので正確に伝えなければならないことを体得させた。歌唱指導では音楽の指導だけではなく、説明することも必要となる。言葉使い・方言・登録商標などといった注意すべき事項について説明し、子どもたちが理解できる正しい話術を指導した。音楽用語を記憶することも大切である。

【指導上の留意点】

当初は恥ずかしい気持ちがぬぐえず、表現が中途半端になりがちであったが、学生同士が互いの指導に触れることにより、次第にスムーズに行えるようになった。歌唱指導には総合的な音楽力が必要であるが、難しいと感じる学生も見受けられた。丁寧に心を込めて歌い込んでいくことにより、分かりやすく楽しめる歌唱指導が可能となり、達成感を得るように心がけた。

楽譜に書かれていることを忠実に伝えることの大切さを理解させた。また、子どもたちが必要としている伴奏を適切に演奏できるように指導した。テレビなどのメディアを通して音楽を聞いている世代の子どもたちにどうしたら無理なく歌詞の意味が伝わるかを考え、工夫できるように指導した。楽しい雰囲気、和やかさも大切であることを指導した。

（6）合唱

全員での合唱に取り組んだ。曲目は下記の通り。

（前期）

唱歌メドレー ～文部省唱歌でつづる日本の四季～（構成・編曲：森垣桂一）・おぼろ月夜

（文部省唱歌、高野辰之作詞、岡野貞一作曲）・われは海の子（文部省唱歌）・Believe（杉本竜一作詞・作曲）

（後期）

唱歌メドレー ～文部省唱歌でつづる日本の四季～（構成・編曲：森垣桂一）・もみじ（文部省唱歌、高野辰之作詞、岡野貞一作曲）・冬景色（文部省唱歌）・クリスマスソングメドレー（構成・編曲：伊藤康英）・あら野のはてに（由木康訳詞、18 世紀フランスキャロル）・きよしこの夜（Ｊ．モーア作詞、グルーバー作曲）・もろびとこぞりて（讃美歌、ヘンデル作曲）・White Christmas（I.バーリン作詞、作曲）

保育の現場では合唱する機会が多い。ソプラノ、アルトのパートどちらも歌えるようにリピートの際にパートも入れ替えて歌った。合唱の経験がない学生にも多く合唱譜の説明をし、パートごとに音を確認させた。互いの声を聞き合いアンサンブルの楽しさを味わせた。パートごとの練習で合唱譜の読み方を学生同士でも行って確認させた。また、パートごとの練習では、正しく音程をとって歌うために楽器を補助的に使用することも学ばせ、個々の学生が自然に指導的立場に立ってまとめていくことができるようにも促した。

【指導上の留意点】

学生同士でコミュニケーションをとりながらまとまってゆけるように配慮した。四季の移り変わりを歌で感じ、楽しみを表現できるようにした。クリスマスソングでは英語にも取り組み、保育現場での指導に生かすことができるようにした。

(7)「声楽Ⅱ」の授業内容に関するまとめ

幼児教育者は、音楽面でも総合的に高い技術、知識が求められる。ピアノ、声楽、楽典など様々な面でバランスよく力を身に付けておく必要があるが、そのためには時間がかかり、忙しい学生生活の中でどのようにその時間を確保するかが大きな課題となる。また、歌や楽器の練習のためには練習場所の確保も課題となる。学生は練習の必要性を感じており、真剣に練習に取り組む姿が見られる。短時間で効果が得られるように練習方法も指導しているが、練習を繰り返さなければならないことに対してストレスを感じている学生も見受けられる。達成感を得ながら継続して練習することができるように助言することが大切であると考える。ピアノ・声楽・楽典など、互いに相乗効果を生むように連携し指導を行っているが、近年は科目選択の関係で履修していない学生も増加しているのが現状であり、その面の解決が課題である。

本授業において、学生は楽しそうに全身で歌い、動きを伴う課題も喜びとともに行うことができていた。実際の保育現場においては様々な曲を指導することになる。本授業ではそのことを踏まえ、時節に添って多数の歌を扱い、子どもたちに伝える際に間違えて伝えることがないように楽譜に忠実に作詞・作曲者の意図を正確に読み取ることを大

事にするように促した。季節感が薄れゆく生活の中においても、受講学生が歌を通じて感覚を磨き、四季の喜びを感じ、子どもたちに伝えることができる人材として育つことを目標として本授業に取り組んだ。

5. 音楽面での今後の課題

（1）カリキュラムについて

従来、本学においては音楽分野の科目が多数開講されていて、幼児教育系の短期大学としては内容も充実しており、そのことが本学の特色の一つとも言えるものであった。それは、かつて本学において小学校教員養成課程を有していて「教科に関する科目」としてそれらの科目群を開講していたことの流れを受け継いでいるとも考えられる。結果的に音楽的に指導力のある保育者を多数輩出することができ、その面でも社会的に一定の評価を得ることができたと考えられる。しかし、近年においては音楽以外の必修科目が増加したことの影響もあり「音楽理論」、「音楽理論Ⅱ（伴奏付特講）」、「声楽Ⅱ」などの選択科目を履修する学生が減少してきている。

一方で、平成 28 年の教育職員員免許法・同施行規則の改正に伴い、今後は幼稚園の教職課程も見直されることとなった。現行の「教科に関する科目」がなくなり、それらの部分は「領域及び保育内容の指導法に関する科目」に置き換えられるとのことである。本学においてもそのような流れに沿うかたちでカリキュラムの大幅な改定が進められつつある。今後においても従来どおり音楽分野の授業の時間数を維持することができるかということとともに、授業方法や内容の見直しも重要な検討課題となっている。

（2）保育者として求められる音楽力について

前項までの授業内容に関する考察を踏まえ、保育者の力量として音楽面で求められることをまとめると次のようなことが考えられる。

【良い模範を示して歌うこと】

・しっかりとした声（発声）で歌えること。

・正しい音程で歌えること。

・音楽的表現力・魅力をもって歌えること。

・無伴奏で一人で歌えること。

・多くのこどもの歌を知っていること。知識を子どもたちに提供することができること。

【子どもたちに気を配ること】

・子どもたちの声や息づかいを聴くことができること。

・伴奏を弾いたり弾き歌いをしているときも子どもたちの声を聴き、合わせることができること。

・歌ったり楽器を演奏したりする時、楽しい雰囲気を大切にすること。

（3）教材について

現状においてポリフォニーの指導は、直接現場での音楽活動を想定したものというよりも学生自身の音楽力の育成に主眼を置いて行っていると言える。そこで問題となるのは、実際の保育現場で使用できる教材が少ないことである。わらべ歌などの短な断片をチームに分かれて歌い交わすなどの方法でポリフォニーへの導入を図ることは保育現場においても十分可能で、今後はそのような教材の開発も必要となると考える。

I.H.コチャールは、ポリフォニーで心を合わせて歌うことの大切さについて、幼児にも可能な相手を配慮することとの観点から次のように述べている。「子どもたちはこのような遊びを実にのびのびと行う。このような練習は、子どもたちが互いに相手に対して注意を払うことの始まりである。」[1]

一方で、それぞれの学生のピアノ演奏技術に応じた簡易伴奏の方法も指導してゆくべきであると考えている。現状では「音楽理論」、「音楽理論Ⅱ（伴奏付特講）」の授業においてこのようなことにも触れるが、選択学生が少ない。今後は、より多くの学生が、少しでもそのような知識を得られるようなカリキュラム構成が必要であると考える。

結び

このたび公示された新たな幼稚園教育要領[2] に付け加えられた前文の最後に次のような記述がある。「幼児の自発的な発動としての遊びを通しての総合的な指導をする際に広く活用されるものとなることを期待して,ここに幼稚園教育要領を定める。」子どもを主体とし、子どもに寄り添ったかたちでの総合的な指導をすることが求められている。

幼児教育全般において、音楽、とりわけ「歌うこと」は、その根幹の一部をなすものであり、常に大切にすべきことであると考える。本学においては筆者 2 名による授業以外においても歌うことが重視されていて、学生はいろいろな機会で歌うことに接する。

本稿において保育者に求められる音楽力について詳細に記述した。学生がそれらを身に付けることを目標としながらも、心が閉ざされていては、のびのびと音楽を奏でることはできない。子どもたちとの真の心の交流のもとに、子どもたちが豊かな音楽活動ができるよう寄り添うこと。そして、保育者自身が子どもたちとともに歌ったり楽器を演奏したりして音楽をすることに喜びを感じ、音楽の楽しさを心から味わえることが最も大切であると考える。そのような保育者育成を真の到達点と捉え、今後授業内容においても再構築を進めてゆきたい。

引用・参考文献

1. イルディコー・ヘルボイ・コチャール著、山岸 徹 訳『合唱指導の出発点』音楽之友社、2002 年、15 頁。
2. 『幼稚園教育要領』文部科学省、平成 29 年 3 月 31 日公示、平成 30 年 4 月 1 日施行